

住井すゑとその文学の里(三十九)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功くりはら いさお

川村衛まもると昭和10年代の茨城県会

―川村は岡田村長・新制牛久町初代町長なども歴任―

川村衛は、明治35年(1902年)に岡田村大字岡見で、名誉職の稲敷郡会議員と岡田村長(明治35年3月から同40年(1907年)3月まで。大正15年(1926年)3月から昭和4年(1929年)8月まで)を歴任している川村喜太郎の末っ子長男として生まれた。竜ヶ崎中学から大正10年(1921年)に法政大学に進んだが、中途退学して岡田村に戻った。税務署吏員、小学校訓導(教員)を経て、昭和8年(1933年)30歳の時に村会議員選挙に当選。翌年、池井貴次村長の下で助役に就任するが、その翌昭和10年(1935年)1月に村会議員の互選によって村長に就任、同17年(1942年)6月まで在職した。一方、昭和10年9月から同22年4月(1947年)まで稲敷郡選出の県会議員の名誉職にあり、同10年から同17年までの間は、県会議員と岡田村長を兼職していた。さらにその間の昭和21年(1946年)執行の衆議院議員選挙(この時は全県一区制が

とられた)に山本実彦委員長の日本協同党公認で立候補しているが次点であった。翌22年に総司令官マッカーサー元帥のGHQ(連合軍の対日占領機構)公布の公職追放令(大政翼賛会役員経験者・戦争遂行者および軍部高級官僚・言論人・経済人が対象にされた)の適用で公職追放になるが、解除後の昭和26年(1951年)9月に岡田村長に返り咲いた。

昭和28年(1953年)9月、町村合併促進法が公布され、向こう3年間に1万を数える町村を約3分の1に縮減するめどによって、強力に合併が推進された。岡田村長の川村は牛久町長の吉田虎次郎と、岡田村と牛久町の合併を推進して、同29年(1954年)4月の新制牛久町誕生に尽力、川村が無競争で初代町長に就任した。

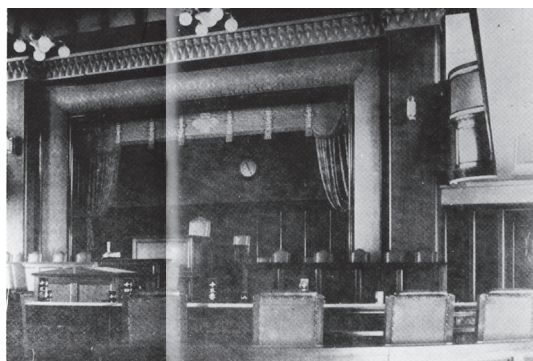
ところで、昭和10年に県会に議席を得ていた川村は、政友会に所属して、翌11年(1936年)12月4日夕刻開会の通常県会で、「議長の一身上の問題について緊急動議を出したい(同年2月執行の総選挙で当選した一区の民政党代議士の選挙違反に連

座しているのに辞職しない議長に対しての弾劾案提出の動き)」と発言、会議は紛糾、中断。本件が130年余りにわたる県議会史上に川村衛のその名をとどめることになった。この部分の本資料は、『大地に緑の塔を―茨城県議会100年の歩み―茨城県議会発行』などだ。

昭和14年(1939年)に入ると米国の対日経済封鎖によるガソリン不足が著しくなり、同年10月からは配給制(※)になった。川村は、同年12月開会の通常県会で登壇、県側に「片田舎では、夜分など医者頼みに行く」と自動車頼んで来い、そこで一里も離れた自動車営業所に行くというソリンがないから出られめという」実状を訴えた。

昭和15年(1940年)の夏は茨城県会でも民政党、県政倶楽部、政友会、一新会(旧昭和会)などの会

派が大政翼賛会への収れん直前であった。8月26日・27日両日、臨時県会が開かれることになり、それに先立って同月20日の午前11時から茨城会館において全員協議会が持たれた。県側からの議案内示の後、水戸市選出の鈴木剛次郎議長が全議員を水戸市内の遠藤食堂に招き、会派を解消して大政翼賛会へ



↑昭和5年(1930年)新築の茨城県庁舎2階の県会議場。川村衛は、昭和20年(1945年)12月から21年(1946年)9月まで第43代副議長、同21年9月から22年(1947年)4月まで第44代議長を歴任。(昭和54年3月茨城県議会発行『郷土百年―茨城県議会100年写真集』より転載)

収れんするための段取りの話合いが持たれた。まず従来の各派交渉委員で構成する院内総務制を解消して、議事進行と県当局との連絡交渉に当たる世話人を置くことの提案があつて、全員がこれに賛同した。次に議員控室の会派別をやめて一室にまとめることが承認された。最後に新たに置かれる世話人には、宮原庄助、木城晟、小篠雄二郎、野口谷作、横島武治、菊地豊、川村衛の7議員が指名された。この年の10月に発足をみた大政翼賛会の茨城県支部が設置され、支部長を知事が兼務し、郡・市支部長には市町村長が就任した。※その他の生活必需品(米・みそ・しょうゆ・砂糖・マッチ・木炭など)が切符制になった。茨城県の場合、県民の一カ月の砂糖配給量は一人300グラムであった。